

人権なら

2024年11月1日

第167号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

言いたいことを言い合おう!

第29回ピープルファースト大会が奈良で

第29回ピープルファースト大会が10月12-13日、JR奈良駅近辺にある、なら100年会館などでありました。全国から914人のなかまが集まりました。

初日は開会式と全体会があり、夜はホテル日航で交流会。2日目は県コンベンションセンターで分科会。そのあと、ホテル日航に移り、閉会式を行いました。

千葉で起きた虐待死亡事件を劇にして上演

今大会は「楽しもう! 助け合おう! 言いたいことを言い合おう」がテーマでした。10か月間にわたって準備をしてきました。



2013年に千葉県の袖ヶ浦福祉センターで虐待死亡事件が起きました。ピープルファーストは同センターへ抗議に行きました。たくさんの職員が虐待をしていたことがわかりました。

同センターは昨年3月、廃止となりました。闘ってきた意味を実感できる出来事でした。この闘いを劇「入所施設をなくすぞ!」にして演じられました=写真。

優生保護法裁判の最高裁判決勝訴を喜び合う

優生保護法裁判の原告、北三郎さん(仮名)、千葉広和さん、小島喜久夫さんが登壇し報告。最高裁判決の勝訴を会場のみんなど喜び合いました=写真。



このあと、「言いたいことを言い合おう」と、会場からの1分間スピーチがありました。2日目は「元気の出る

はなし」など、10のテーマで分科会がありました。奈良大会は沢山のの人に支えられ、成功裏に終わりました。

ピープルファーストは1973年に米国オレゴン州で始まり、「『しょうがいしゃ』である前に人間だ」として、「自分たちのことは自分たちで決める」という「自己決定」を柱とする当事者運動として活動しています。

韓国の仲間と柳本飛行場跡をフィールドワーク

大会のあと、韓国の仲間36人と奈良の仲間ら総勢59人が、天理市にある旧柳本飛行場跡地をフィールドワーク=写真。日本の植民地支配下の史実について学びました。(ひまわりの家支援員・吉田裕子)



学習やビンゴゲームで遊ぶ

三宅町「かいほう塾」が学習交流会を催す

「かいほう塾」学習交流会が10月22日、三宅町あざさ苑であった=写真。中学1~3年生のほか、スタッフ、ボランティアの中学校の先生ら計17人が集まった。



学習交流会は年1回、普段の学習とは違った人権学習とか、ビンゴゲームなど楽しい遊びも交えた取り組みを行っている。

この日は、スタッフの山本恵嗣さんが「塾」の歴史や、人権問題に取り組んできたことを話した。

このあと、全員でビンゴゲーム。スタッフが番号を引くと、みんな一喜一憂し、歓声を上げた。誰かの番号が揃うと、皆で拍手を送って喜び合った。時間はあっという間に過ぎ、楽しい交流会となった。

初瀬周辺の信仰と地域づくり

三宅町人権学習講座でフィールドワーク

第4回三宅町人権講座が10月19日にあった。桜井市初瀬周辺をフィールドワーク。井岡康時・奈良大学教授の案内で初瀬周辺



の信仰と地域づくりについて学んだ。参加者は16人。

井岡さんは長谷寺周辺の信仰や祭祀、近世から近代にかけての地域振興や、近鉄長谷寺駅が被差別部落の中に作られたことに触れ、馳向地域が周辺地域とどのように位置づいていたのかに注目したいと。

長谷寺参詣に向け初瀬軌道が1909年に開通

1909(明治42)年に開通した初瀬軌道は、長谷寺参詣の人々の交通を目的とした鉄道で、地域の人々の期待を担って登場。参詣の様相が変わったという。

国道165号線を東へ進み、大鳥居をくぐると長谷寺仁王門まで門前町が続く。

中世には初瀬村の核となる3集落が誕生。枝郷として馳向などの集落も誕生した。



初瀬川左岸に鎮座する長谷山口神社は伊勢信仰を背景に祀られたと考えられる。傍らに伊勢神宮で神に仕えた倭姫命が天照大神を祀り、その後、伊勢に鎮座したとの伝承を伝える「磯城の厳櫃」碑があった。

部落改善運動に貢献の大和同志会藤井彦五郎

さらに進み、与喜天満神社へ。神社の祭礼の行列の中の「徒士郎」は被差別部落が担った。呪術的な役割を遂行していたと理解できる。

法起院では大和同志会の幹部会が開かれている。その副総理、藤井彦五郎は明治30年代から部落改善運動を進め、馳向に青年会を結成。産業組合を組織し、妙光寺境内にあった小学校と、初瀬小学校との統合を実現するなど、周辺地域を巻き込み、人間関係をつくって街づくりを進めた、と説明した。

大和国と河内国の境に位置

第3回県民歴史講座で「王寺駅周辺を歩く」

県立同和問題関係史料センターは10月22日、第3回県民歴史講座を開催。「王寺駅周辺を歩く」をテーマにフィールドワークした=写真。



この辺は「大和国・河内国の国境で、亀瀬越の大坂街道、大和川水運が通過する交通の要衝。近代以降は鉄道の乗り継ぎ拠点」として発展。1982年の大和川大水害では、大和川と葛下川が合流する久度付近は甚大な被害を受けた。

大和川水運が通る要衝だが大水害の被害も

王寺駅から鼻緒町の狭い路地を抜け、関西本線第一井路開渠(通称カルケツト)から宝物「春日曼荼羅」で知られる久度神社へ。「曼荼羅」は中世に久度郷にあった春日講内を持ち回った「めぐり本尊」と考えられる。



持聖院は真言律宗の寺院。鎌倉時代に貞慶によって創建された惣持寺の塔頭だった。本堂前に線刻「一針薬師笠石仏」(快慶作)が安置する。春日神社は1210年、貞慶が惣持寺の地主神として創建した。

聖徳太子「葬送の道」は近世には当麻街道と

庚申碑(庚申信仰は中国伝来の道教に由来)から「葬送の道」へ。古代からの道で、聖徳太子が亡くなった斑鳩から墓所の磯長まで葬列が通ったとされ、葬送の道と呼ばれる。近世には当麻街道と呼ばれた。

達磨寺は臨済宗南禅寺派の寺院。本尊は千手観音坐像。山号は片岡山。「日本書紀」に聖徳太子が飢人と出会った地と記され、「飢人伝説」となっている。

境内周辺には古墳時代後期(6世紀後半)とされる古墳が3基ある。達磨寺3号墳は平安時代の終わりごろには達磨大師の墓だと考えられるようになった。達磨寺本堂は3号古墳の上に建てられている。

コロナ差別で無らい県運動想起

天理市丹羽市校区人推協がハンセン病学習会

天理市丹波市校区人推協が10月12日、人権学習会を開催＝写真。ハンセン病回復者支援センターの加藤めぐみさんと、いちょうの会のMさんが講演した。参加は130人。



加藤さんは障害者の娘さんと地域で生活する中で、ハンセン病回復者も、ふるさとや地域で当たり前のように生活できる共生社会を目指そうと取り組んできた。

加藤さんは、コロナ差別は官民一体で展開された「無らい県運動」を想起させた。ハンセン病問題の過ちが生かされなかった。この問題から学び、過ちを繰り返さないための人権教育、啓発が重要と提起した。

勝訴したあと、娘にハンセン病を明かした

Mさんは「私の歩んだ道」を講演。1945年、沖縄で生まれた。両親はハンセン病患者。療養所で子どもは生まれないと言われた。だが、戦時下での避難先だった「壕」で生まれた。



6歳のとき、沖縄愛楽園に。その後、鹿児島星塚敬愛園に。15歳のとき、長島愛生園新良田教室に入学。18歳のとき、鹿児島県立工業高校に入学。卒業後、大阪府庁の試験に合格も身元調査で落とされた。

回復者の話を聴き、その生き様に触れる

大阪市の面接では「身元調査などしないで」と言った。22歳のとき、市交通局に。34歳のとき、再発。沖縄愛楽園で「社会的に影響を与えるから入院しろ」と。だが、子どもがいるため、大阪に戻った。地域活動に参加し、仲間と愛楽園を訪ねたりしている。

家族訴訟に勝訴したあと、娘にハンセン病のことを明かした。仲間に知れたらという不安はないと語った。

ヘイトクライムとは何か

鶴塚健・記者を講師に招きRAWA連が講演会

「ヘイトクライムとは何かー連鎖する民族差別犯罪」と題する講演会が10月6日、大阪・ドーンセンターであった。毎日新聞の記者、鶴塚健さんが話をした。70人が参加。RAWAと連帯する会が主催した。



鶴塚さんは、取材で関わった京都のウトロや茨木市のコリア国際学園への放火事件から、ヘイトスピーチが容易にヘイトクライムに転化する状況を語った。

これらの事件は「在日特権」や「在日支配陰謀論」という在日韓国朝鮮人への一方的な憎悪感・嫌悪感に基づく「歪んだ正義感」による独善的犯行である。

こうしたヘイトの「単独で思いつきの暴走行為」がヘイトクライムへの転換点となると指摘した。

犯行に至る背景に孤独がある。繋がりが大切

また、「官製ヘイト」として、関東大震災での朝鮮人虐殺について「記録がない」として歴史から抹消したり、高校無償化から朝鮮学校を排除したり、杉田水脈の人権侵犯問題を挙げて、これらの流れに対抗することが必要だと述べた。



一方、朝鮮学校の排除は「政治的・外交的な判断」だとして大阪地裁が取り消しを命令。杉田には法務局が「人権侵犯」と認定。ヘイト規制も各地で条例施行が進む。川崎市の条例では刑事罰も盛り込まれた。

ヘイト規制についてはメディアの事なかれ主義を自省しつつ、プロバイダ責任の厳格化や、表現の自由との兼ね合い、ヘイト規制の議論が進まない状況を説明。メディア・リテラシーの向上、正しい情報の良き受け手、送り手を根付かせなければならないと話した。

最後に、犯行に至る背景には孤独がある。なくすためには繋がりが大切だと語った。ヘイトにどう向き合っていけば良いのかを考えることができた講演だった。

交差性をキーワードに考察

関大成人権問題研究室がシンポ「人権論のいま」

「人権論のいま—インターセクショナル리티の視点から—」と題するシンポジウムが9月20日、吹田市にある関西大学であった。



同大学の成人権問題研究室の開設50周年記念として催された＝写真。

人権研はこれまで、部落問題、人種・民族問題、障害、ジェンダーの4つの研究班で研究を進めてきた。近年は研究班を横断するテーマにも注目が集まる。この日のシンポは、さまざまな差別が重なり、交差するとはどのようなことなのか。「インターセクショナル리티(交差性)」をキーワードに考察するものだった。

清水晶子・教授が基調講演「共生の不安と…」

第1部は、清水晶子・東大大学院総合文化研究科教授が「共生の不安とインターセクショナル리티」と題して基調講演。私たちは他者を必要とする社会に居る。

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

裏金脱税やカルト教団で窮地に陥った岸田に替わり石破政権が誕生。「ルールを守る」と声高に叫んだものの「前言は守らない」。この素早い豹変に支持率は低水準。早くも末期に。こんな政権を担ぐ政党が総選挙で過半数割れも比較第一党に。政権交代には至らず、今後も腐敗世襲政治が跋扈しそうだ。「失われた30年」も延び続ける。軍事費の増額、税金の無駄遣い、国会の軽視、権力の乱用も変わらない。軍拡、増税、改憲の動きも加速する。公共サービス切り捨て、社会保障など福祉切り下げで格差はさらに拡大。生活はより苦しくなる。立憲の議席増でも政策転換は期待できない。今回の選挙では650万人が自公政治を見限り、他党に投票した。そこに光明が見える。

他者に依存しながら生きていくしかない。でも、同じではない人が居る。同一性が脅かされる不安を抱えていかざるを得ない。差異を超え、共に生きることだと。

各研究班の研究者を交えてディスカッション

第2部はパネルディスカッション。パネラーは清水さんと、各研究班から内田龍史、山ノ内裕子、松波めぐみ、宮前千雅子の研究者。司会は守如子・研究者。

各研究者がそれぞれのテーマで報告したあと、討論。清水さんは、インターセクショナル리티は大事な概念。人権というのは面倒くさい。共生をめぐる不安を抱えながら、どう生きるかを考えていくことだと語った。

栗本英世さんの半生を記録

映画「OKAは手ぶらでやってくる」が封切りに

栗本英世さんの半生を記録したドキュメンタリー映画「OKAは手ぶらでやってくる」が10月26日、大阪・シネ・ヌーヴォで封切。鑑賞した。



栗本さんは1980年代後半、東南アジアに飛び出した。ラオスやタイで売られる子どもを助けようとする。1996年には内戦終了後のカンボジアに。村民と地雷の除去を始めた。

さらに、子どもの人身売買と闘うため、「こどもの家」を開設。寺子屋も始めた。人々からは「オカ」(チャンスの意味)の愛称で親しまれ、2022年に亡くなった。

古川沙樹さんは撮影に協力。出演もしている。映画は11月8日まで、大阪・シネ・ヌーヴォXで上映中。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail:info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/